
ラブ・ラビリンス

言紡ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブ・ラビリンス

【Nコード】

N3947B

【作者名】

言紡ぎ

【あらすじ】

1人は初恋の人で最愛の人。1人は高校・大学と同じ学校で、クラブもクラスもずっと同じなあの子。そして、僕。三人は入り組んだ迷宮へと迷い込んでゆく。「恋」は僕らを奥へ奥へと誘うんだ。その先で離れ離れになろうと。その先が泥沼だろうと。桃源郷のような世界だろうと。（お知らせ）日を空けすぎて完全に執筆予定だった内容を忘れています。完結は難しいかと思えますのでご注意ください。

- 0 - 僕から君へ

下心なんてなかった。

少しだって、なかった。

ただの親切心。

だったのに。

僕、磯野一徹は君のこと愛してる。
信じてくれないかな？

- 0 - 僕から君へ（後書き）

試験的に投稿しています。

執筆中の作品ばかりたまるのでつい投稿してしまいましたが、完結の目処はついておりません。

駄作になる可能性は大きいと思いますが、それでも最後まで書けるように努力したいと思ってますので長い目で見てやってください。

感想戴けたら喜びます。

- 1 - 夜道

「うわっ、暗いなー」

バイトの帰りはいつもより遅くなってしまい、辺りは暗かった。

「真っ暗。灯りがなけりゃ、駅まで行くのも危ないんじゃないか？
これ」

同じ職場で働く女の子を送って帰ろう、そう思いながらケータイを開く。

メールの宛先は彼女。

迎えに行くの遅くなる、とだけ入力して送信した。

ほっと息を吐くと息が白かった。

「冬だなあ」

それが無闇に、無意味に嬉しくて1人で笑う。

その時、後から出て来た女の子が怪訝そうな顔をしたのを見て急に恥ずかしくなり、少し赤くなって、笑いながら「送っていくよ」と声をかけた。

女の子は嬉しそうに頷く。

「ありがとっ」

そう言いながら隣に並んで歩き出す。

「いっくんって、優しいね！」

喋っていると楽しい子で、バイクを押していることもバイトの疲れも忘れることができた。

ふと、不思議そうに隣を歩く子が聞いてきた。

「ねえ、どうしてバイクの後ろ乗せてくれないの？その方が速いの
に」

その質問に、ちよっと言葉を選びながら答える。

「彼女と約束したんだ。僕の後ろは彼女だけが乗っていいことにし

よう、って。だから由実ちゃんを乗せてあげることが出来ない。ごめんね」

照れながら、でもはつきりと言う。

僕は彼女のことを誰より好きだから、そのことは何より大切にしたいことの1つだった。

嘘はつきたくないし、隠すようなことでもない。

「そっか、いつくんで彼女いたんだ…」

ちよつと複雑そうに笑みを浮かべる。

「私でも彼氏いないのに、いつくん生意気だよ。しかも黙ってたし」そんなこと言われても、と困っていると由実ちゃんはフツと笑って脇を小突いてきた。

「冗談だよつ、もういつくんで分かり易すぎ。すぐ表情に出るんだから。そこがちよつと可愛いんだけどね」

「人のこと言えるかよ。いつも1人で百面相やってるようなヤツが…」

そう切り返してやると、ぷうつと頬を膨らますこの子が単純に思え、また、かわいらしくも思えてくる。

僕は由実ちゃんの頬を人差し指で軽くつつくと、顔をのぞき込んだ。
だ。

「由実ちゃんかわいいんだから、その気になれば彼氏になりたい人もいるんじゃないの？」

「いやいや、私告白されたことか1回もないよ？そういう噂も聞かないし」

ちよつと驚いたように、赤くなって答える様子がまたかわいらしかった。

でも自分の彼女はもっとかわいいと思えることが僕には幸せだった。

話をしながら歩き、やがて明るい通りに出た。

この道をまっすぐ行けば駅に出る。

「ありがとつ。ここでもういいよっ」

人通りも多く、賑やかな商店街がすぐそこに見える。

「うん、ッ…！」

…分かった、バイバイまた明日、と続ける前に、不意に口が塞がれた。

唐突過ぎて反応できなかった。

何が起こっているのか、理解できない。

……。

それは、キスだった。

何が起こったのか分からないままに唇は離れていく。

「バイバイ」と言ったのであるう彼女の声は、僕には聞こえていなかった。

由実ちゃんが見えなくなって、今、目が覚めたようにぶるっと首を振った。

気を取り直してバイクにまたがる。

エンジンをかけ、ヘルメットをかぶろうとしたちょうどその時に、1人の女性がこっちを見ていることに気付いた。

「薫…」

そこには今から迎えに行くはずの彼女が立っていた。
そしてただ、じっとこちらを見つめていた。

- 2 - 最愛の人

駅前：

迎えに行くはずだった彼女が何故かいて。

黙って一緒に商店街へ。

そして…

僕らは喫茶店にいた。

お互い長いこと黙っていた。

2人の間を流れるのはホットコーヒーをすすする音だけで、静かに時間のみが過ぎていく。

バイクの駐禁が気掛かりで、僕はそっちのことばかり気にしてる…
けれど、ね。

そんなの”ふり”だけだって、多分バレている。

でも僕は、自分より一回り小さな目の前の女の子に目を向けるのが、ただ怖くてたまらない…。

それで止めるに止められなかった。

それでも、沈黙には耐えきれず口を開こうとする。

が、またすぐに口を閉じた。

気まずい空気が流れる。

しばらくして、薫がとうとう口を開いた。

「…てっちゃん、」

その声にビクツとして姿勢を正す。

『僕は何も悪くない…』

そう、何も悪いことはしていない。
しかしさっきのことが負い目になって、萎縮してしまう。

「てっちゃん、さっきの何？」

「あ…えと…その…あの子、バイト先が同じクラスメートなんだけど…、えっと…何ていうか…結構悪戯好きでね、…きつと…からかうつもりで、キスしてきたんだと思う」

刹那、沈黙があつて不安と後悔に苛まれる。

堂々と答えるべきだった。

それが出来ないことは分かっている、後悔と恐れはつのつていく。

「ふーん…」

しどろもどろになってしまった僕の言葉に、固い表情のまま薫は眉ひとつ動かさない。

その視線を嫌というほど味わう。

その寒い程の突き刺してくるような感覚とその間の静寂が、嵐の前の静けさではないことを、ひたすら祈る。

「そんなことどうでもいいんだけどね」

……。

あまりに容易く祈りが潰えたことに苛立つ。

そして思う。

『ご都合主義かもしれないけれど、さ…』 神への祈りなどそうそう届くものでもない。

世界中のどれほどの人が毎日毎日神に祈ってるのか、知ったことじゃあないけれど。

『…神様、恨むよ』

それにギリシャ神話の神々は決して万能ではなかったはずだ。他

の宗教の神々も同じであるならば、祈りが届いたにしても何にしても叶えられることなんて極稀。

『まあ、そうは言っても……』

そんなことは至極当たり前の話だった。

『一応、無宗教だもんなあ』

というか、すごく勝手な話だった。

「あーあ…、そんな人だとは思ってなかったな…」

そんなつまらない僕の思考はもちろん、僕の言ったことなんて、それ自体がなかったことのように話す薫。

背中を冷たいものが走る。

「ちょっと、薫？」

「てっちゃんのこと信じてたのに」

ことばの1つ1つがやけに刺さってくる。

腹に、頭に、ずっしりと重いものが乗っかってきているような錯覚に陥る。

「薫ちゃん？」

「私の気持ち、裏切られちゃった」

「おーい…」

……。

泣きそうな気分だ。

このままだと余計、辛くなっていきそうで、嫌な予感がして。

続きを聞きたくなくて。

無理やり話を変えてみた。

「薫さん？ところでね、今日はまたどうしてあんな場所に？」

いつもとは違う口調。

妙な緊張感。 汗ばむ背中と手のひら。

それらに、自分が追いつめられてるのに気付く。

「早めに終わったからね、今日は。知ってるでしょ？私のバイト先、駅を挟んでちょうど反対側にあるの。てっちゃんのバイト先に向かおうとすれば駅通るのよ。そしたら、イチャイチャしてるのを見つけたの。」

どうやら藪蛇だったみたいで、正直悲鳴でもあげなくなる。

薫の顔を窺うと些か上気している。

「すみません。コーヒーとチョコレートパフェください」

ウェイトレスさんに注文すると、『そんなことでは騙されない』と言わんばかりにキツイ表情になる。

「勘弁してくれよ……」

お手上げだ…

いつもならこの店のチョコパフェで機嫌を直してくれるのに。何がいけなかったのかと自分の運命を呪う。

薫のことが本当に好きで、浮気したことなんてない。

「大体さ……」

笑顔が見たくて、

くだらないことで笑い合いたくて、

薫のこと知りたくて、

僕は結構一生懸命だった。

「…いつだってそうだったでしょ？」

でも、怒らせたり泣かせたり驚かせたり、嫌だったこともあったのかもしれない。

「…曖昧でさ…」

それでもいつも最後には笑いあえてたから、こんな風にしていつまでも、いつまでも一緒にいられると思ってたのに。

いつの間にか薫は僕を問い詰めて、泣きそうな顔してる。

「…不安なんだよ…」

泣かせるのは嫌なのに、また泣かせてしまった。

なんて考えていると怒気を帯びた声が辺りに響いた。

「ちよつと！聞いてるの？」

「へ？」

……。

非常にまずい答え方をしたものだ。

後悔しても今更遅い。

彼女は何かを憂うような悲しそうな顔をした。

「…もう、いい…」

それだけ言い残して薫は行ってしまった。

1人残された僕は伝票と半分以上残ったパフェを見つめながら、最後まで笑顔を見れなかった彼女ことばかり考えていた。

もしかしたら僕はその時、泣いていたかもしれない。

そんなことが分からないくらいには、茫然としていたらしい。

かけがえのない人を追いかけることさえ出来なかったのがまた、ショックだった。

夜が明けてもまだ僕は眠れずにいた。
部屋の中でずっと1人、考え続けている。

「薫…、絶対怒ってるよな…」

彼女を傷付けてしまったんじゃないか。
僕は何をすべきなのか。

そもそも僕の存在意義って何だろう…

考えていても何も始まらない。それは分かっているはずなのに、
詮無きことばかり考える。

多少の飛躍したところで僕には大した問題にはならないと思って、
考え続ける。

「僕って最低の人間なんだよ、きっと」

それだけ動じていたのだろう。

でも脳が麻痺でもしてるみたいに何も考えられなくて、頭の中は
空っぽだった。

感じるのはただ空虚感。

それのみで、酸素を消費するだけの植物以下。

それが僕…

「はあ…」

あの時、冗談の1つでも言えてたら何か違っただろうか。

ただ薫のことばに耳を傾けて、正直に受け答えしていれば。

そもそも、由実ちゃんを送っていかなければ。

「全部夢だったら、よかったのに」

でも…

そんな仮定に意味はない。

次へ活かそうにも、次なんて来そうにない。

そう…思う。

「…いい加減、きりがないけど」

それに時間を遡ってバイト直後に戻れても、恐らくは同じことをするだろうから。

僕はそういう自分に嫌気がさした。

「薫…、何て言ってたっけ…」

どんな顔をしてただろう。

きつと酷い顔だったに違いない。

「ウツ…ク」

久し振りに声をあげて泣いた。

悪いのは自分。

誰も悪くないのだから。

悪い人がいるなら、それは自分だ。

泣き疲れて、涙も止まる。

その涙も乾く頃、少し自虐的に呟く。

「僕って駄目人間なんだな…」

溜め息を吐くと余計に虚しくて、何となく窓を開けた。

曇ったガラスの向こう側は、取り壊しかけの寂れた工場と灰色の空しかなかった。

「侘びしいもんだ。そう…分かってしまうと…」

そして、初めて僕は学校をサボった。

「あー、」

何をするにもだるい。

少しお腹もすいたけど、作る気にはなれない。

酸素を消費するだけで、生産性の欠片もなく、まるで糸の切れた操り人形みたいだ。

「暇だねえ……」

そんな僕でもちよつとはものを考えた。

「疲れちゃったよ、色々」と

つまらない、でも大切なことを。

+++++

自分がいなくなつて困る人っているのかな？

暇だし、考えてみるか……

うん……と、いきなり自分の場合のこと考えても分かんないな。

取り敢えず他の人の場合で考えよう。

……中学校の時、先生の葬式があつたつけ。

いい先生だったな……

亡くなる一週間前まで授業してたつけな。

でも急に亡くなつて、学校で話題になつてた。

お通夜でもみんな泣いてたし。

ん？……待てよ？

でも話題になつたのつて二週間……

いや、精々一週間だったよ？

その後は結構普通に過ごしたし。

あれ？いい先生……だったよね？

……よく考えればお通夜にも行かなかつた友達もいたような気がする。

うーん……

……。

ということは僕がいなくなっても、困る程のこともないのかな？
会社勤めしてて、大切な資料の管理とか企画取り仕切ったりとか
してる訳でもないし。

僕如きがどうなったところで、地球は回り続けるし社会は動き続
けるんだよね。

…でも、薫や由実ちゃんやお父さんたちは悲しんでくれるのかな？
時々でもいいから思い出して…覚えててくれるのかな？

……。

+++++

結構こんな考えに時間をかけていた。

僕は薫に、今まで何をしてあげられただろう。

後悔しないくらいにやれること全てをしてきただろうか。

「人間っていつも、終わってしまったてから後悔してばかりいるよ
な…」

「ファー…」

太陽が高く昇った頃になって、ようやく眠たくなってきた。

「やっとな寝れる、な」

僕みたいな抜け殻のような奴にも、人間らしさは残ってたらしい。

「…あつ！」

何でもいいから薫にメールしなきゃ…

そう思いはしても、指が動かない。

『夜はバイト行かなきゃ、家賃払えないな』と管理人の顔が脳裏
に浮かび、いつしかぐっすりとな寝てしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3947b/>

ラブ・ラビリンス

2010年10月17日04時40分発行